長野市の埋蔵文化財第161集

浅川扇状地遺跡群

古宇木遺跡

――三輪十丁目分譲地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書――

2021年3月

長 野 市 教 育 委 員 会

調査区遠景（空撮・南東から）

調査区北壁土層堆積状況（A区北壁・南東から）

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、多様な人々の生活が営まれてきました。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできないものです。中でも土地に埋蔵されている遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、私たちの祖先の知恵と文化の集積であるとともに、当時の人々の暮らしぶりを現在に伝えてくれる貴重な財産です。

ここに長野市の埋蔵文化財第１６１集として刊行いたします本書は、宅地分譲地造成工事に伴って実施した、浅川扇状地遺跡群に属する古宇木遺跡に関する調査報告書であります。

発掘調査では、弥生時代中期から古墳時代後期の竪穴住居跡を検出したほか、土師器や須恵器等の土器が出土しました。

この調査成果が地域の歴史解明の一助として、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いであります。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解のもと、この調査にご協力をいただいた事業者並びに地域の皆様、また、発掘作業に携わっていいただいた皆様方に厚く御礼申し上げます。

令和３年３月

長野市教育委員会
教育長　近藤　守

例　言

1　本書は、長野県長野市三輪地区における「三輪十丁目分譲地造成工事」に伴い、記録保存を目的に実施された埋蔵文化財緊急発掘調査の報告書である。

2　発掘調査地は、長野県長野市三輪十丁目493番1外に所在し、浅川扇状地遺跡群古宇木遺跡内に位置している。

3　発掘調査の実施については、事業主体者であるジェイエイながのサービス株式会社 代表取締役 関知明 からの委託により、長野市長 加藤久雄 が受託し、長野市教育委員会が直営事業として実施した。なお、調査は長野市埋蔵文化財センターが担当した。

4　埋蔵文化財の保護対象範囲は、開発事業面積1,790.62㎡の全域である。このうち、道路建設予定範囲の約482㎡を発掘調査実施対象範囲とし、調査を行った。なお、実質調査面積は238㎡である。

5　現地における発掘調査は、令和元年9月17日から同年11月8日まで行った。うち、中断期間は10月22日から11月4日までである。

6　現地における発掘調査および本書の編集は飯島の指導のもと小野と篠井が担当した。執筆分担は以下の通りである。

飯島哲也	第1章 第1節
小野涼香	第1章 第2節・第3節、第2章、第3章 第3節
篠井ちひろ	第3章 第3節および上記以外

7　調査で得られた諸資料は、長野市教育委員会長野市埋蔵文化財センターで保管している。出土遺物の注記記号はアルファベットの「AKUK」である。

8　発掘調査の実施に際し、委託者であるジェイエイながのサービス株式会社におかれては、埋蔵文化財に対して深いご理解を頂き、絶大なご協力を賜った。

凡　例

本書では、調査によって確認された遺構・遺物について、その基本的資料を提示することに主眼を置いた。資料掲載の要領は以下の通りである。

1　基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系（国家座標）の第Ⅷ系（東経 138° 30'00"、北緯 36° 00' 00"）の座標値（日本測地系 2011）と日本水準原点の標高を基準とし、株式会社写真測図研究所に委託した。

2　掲載した地図は上が真北を示す。また、実測図等に掲載した方位は全て座標北を表している。

3　掲載した遺構図、遺物実測図の縮尺は各図版に提示した。個別遺構図に関しては 1/80 の縮尺を基本としているが、微細図その他についてはこの限りではない。

4　掲載した遺構写真、遺物写真の縮尺は任意である。

5　遺構の略記号は以下の通りである。遺構番号は現場で付した通し番号を基本とし、整理調査時の検討によって欠番となったものや変更となったものについては、遺構一覧表において旧番号と欠番表記を併記した。
竪穴住居跡：ＳＢ　溝状遺構：ＳＤ　土坑：ＳＫ　小穴：ＳＰ　カマド跡：ＳＬ　性格不明遺構：ＳＸ

6　遺構一覧表および遺物観察表の凡例は、それぞれの表掲載頁に記載した。遺構の規模、遺物寸法の欄において、括弧付の数値は残存値を表す。

7　遺構実測図において、遺構の推定ラインを破線で、住居跡床面等の硬化面の範囲を一点鎖線で示した。また、焼土および被熱痕の範囲をグレー塗りつぶしで示した。

8　遺物実測図において、断面黒塗りは須恵器を表す。また、赤色塗彩が認められる資料は、その範囲をトーンによって示した。

9　土層の色調記載は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」によるものである。

目　次

巻頭写真
序
例　言
凡　例
目　次
第１章　調査経過…… 1
　第１節　調査に至る経緯　…… 1
　第２節　調査体制…… 4
　第３節　調査経過（調査日誌抄）…… 5
第２章　調査地周辺の環境…… 6
　第１節　遺跡の立地…… 6
　第２節　歴史的環境…… 7
第３章　発掘調査成果…… 10
　第１節　試掘調査と調査区の設定…… 10
　第２節　調査の概要…… 13
　第３節　遺構と遺物　…… 14
　第４節　C区工事立会い …… 17
　【遺構一覧表】【遺構実測図】【遺構写真】
　【遺物観察表】【遺物実測図】【遺物写真】
第４章　総括…… 34
抄　録
奥　付

挿図目次

図１　調査地位置図（1/50,000）…… 2
図２　調査地位置図（1/5,000）　…… 3
図３　開発区域と発掘調査対象範囲(1/2,500)　3
図４　調査地周辺の地形（1/3,000）　…… 6
図５　調査地周辺遺跡分布図（1/50,000）… 9
図６　試掘調査位置図（1/1,000）　…… 10
図７　調査区設定図（1/1,250）　…… 10
図８　A区全体図（1/120）　…… 11
図９　B区全体図（1/120）　…… 12
図10　基本層序柱状図（1/40）　…… 13
図11　個別遺構実測図１　…… 19
図12　個別遺構実測図２　…… 20
図13　調査区北壁土層堆積状況図　…… 21
図14　個別遺構実測図３　…… 22
図15　個別遺構実測図４　…… 23
図16　遺物実測図１　…… 29
図17　遺物実測図２　…… 30
図18　遺物実測図３　…… 31
図19　古字木遺跡周辺の集落推定範囲図
　（1/10,000）…… 35

表目次

表１　遺構一覧表…… 18
表２　遺物観察表…… 28

写真図版目次

遺構写真図版１…… 24
遺構写真図版２…… 25
遺構写真図版３…… 26
遺構写真図版４…… 27
遺物写真図版１…… 32
遺物写真図版２…… 33

第１章　調査経過

第１節　調査に至る経緯

調査地の所在する三輪地区は、長野市街地の北東部に位置する閑静な住宅密集地である。その中にあって、かろうじて残っていた水田に小規模な宅地造成の開発工事計画が浮上したのは平成30年に遡る。設計コンサルタント会社の担当者から事前相談を受け、当該地は「周知の埋蔵文化財包蔵地」である浅川扇状地遺跡群の範囲内であることから、埋蔵文化財の保護に関する手続きが必要となる旨を伝えた。同年４月４日付で文化財保護法第93条の規定に基づく「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」が提出され、これに対して長野市教育委員会から同年４月12日付30埋第２-３号にて「発掘調査」の保護措置を指示した。調査に先立ち、埋蔵文化財の包蔵状況を確認するために同月24日に試掘調査を行ったところ、明瞭な包含層を確認したことから、記録保存を前提として保護措置について協議を継続することとなった。その後、開発事業者側の都合による設計変更等の調整が進む中で保護協議を重ね、開発区域の全域1,790㎡を保護対象とし、うち埋蔵文化財に影響のある範囲482㎡を発掘調査対象として記録保存を目的とした発掘調査を行うこととなった。これにより、事業主体者から発掘調査依頼書の提出を受け、令和元年８月19日付で事業主体者との間に「埋蔵文化財の保護に関する協定書」と「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結した。

現地での発掘調査は、同年９月17日から11月８日（うち、中断期間10月22日～11月４日）までの53日間行った。調査終了後、長野県教育委員会教育長あてに令和２年１月30日付元埋第252号にて「発掘調査終了報告書」を、委託者あてには同日付元埋第251号にて「発掘調査現場作業の終了及び引き渡しについて（通知）」を、長野中央警察署長あてには同日付元埋第253号にて「埋蔵文化財の発見について（通知）」を提出している。整理調査は令和２年度に実施し、令和３年３月本報告書の発刊に至る。

調査地周辺航空写真（▼の交点は調査地の位置を示す）

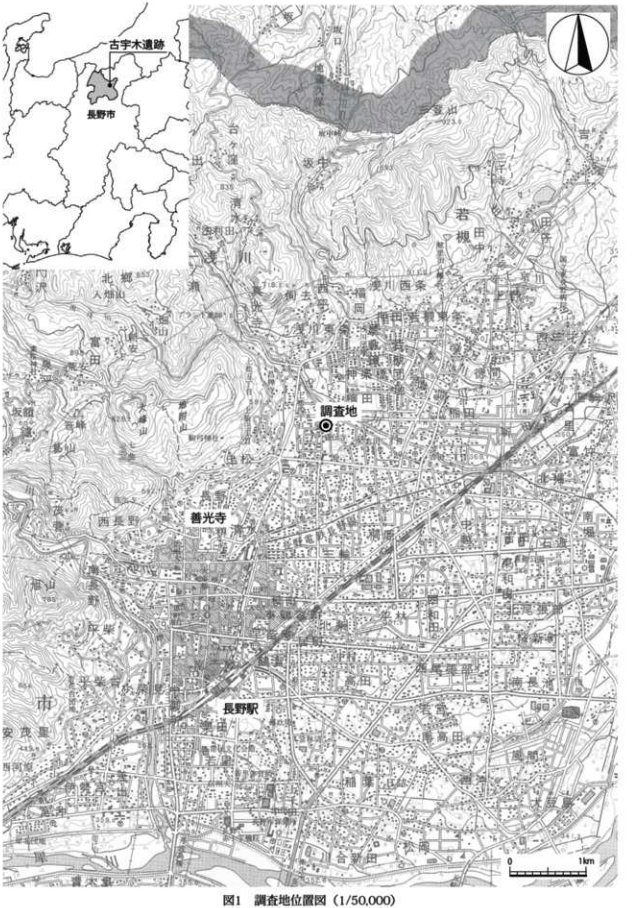


図1　調査地位置図（1/50,000）

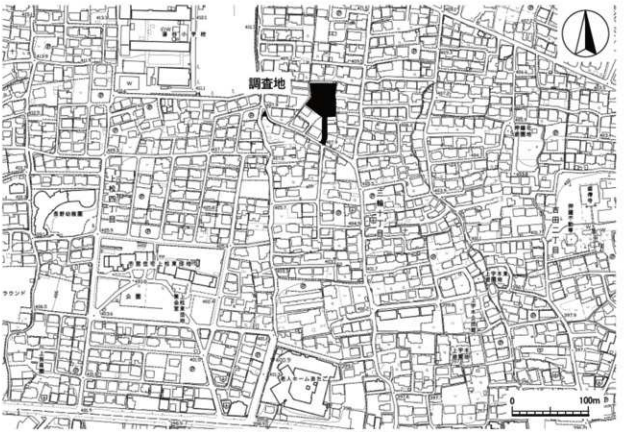


図2　調査地位置図（1/5,000）

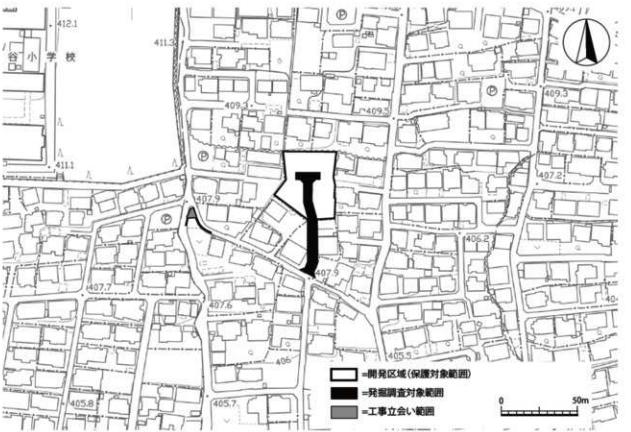


図3　開発区域と発掘調査対象範囲（1/2,500）

第２節　調査体制

本調査は、ジェイエイながのサービス株式会社より委託を受け、長野市教育委員会の直轄事業として、長野市埋蔵文化財センターが実施した。その組織は以下の通りである。

調査主体者	長野市教育委員会	教　育　長	近藤守
総括責任者	長野市教育委員会	教育次長	竹内裕治（令和元年度）
			樋口圭一（令和２年度）
総括管理者	長野市教育委員会文化財課	課　　長	小柳仁彦
調査責任者	長野市埋蔵文化財センター	主幹兼所長	石田正路（令和元年度）
		所　　長	大井久幸（令和２年度）
調査担当者	長野市教育委員会文化財課（埋蔵文化財センター担当）　課長補佐　飯島哲也		
調 査 機 関	長野市埋蔵文化財センター		
	庶務担当　係　　長	小林晴和	
	事務職員	宮本博夫	
		宮崎千鶴子（令和元年度）	
		平林満美子（令和２年度）	
	調査担当　係　　長	風間栄一	
	主　　事	小林和子	
	研 究 員	篠井ちひろ（主任調査員）、小野涼香（調査員）、	
		清水竜太、田中暁穂、遠藤恵実子、社本有弥（令和元年度）、	
		井出靖夫（令和２年度）、伊藤愛（令和２年度）	

発掘調査員	向山純子
発掘補助員	後藤大地
発掘作業員	青山三枝子、内田正征、江守久仁子、岡沢貴子、小澤美智子、大日方孝、 金子ポンティブ、杉本千代、中村泰明、峯山真由美、宮尾弘子、渡辺由美
整理調査員	青木善子、市川ちず子、鳥羽徳子、武藤信子
整理作業員	飯島早苗、清水さゆり、西尾千枝、待井かおる、宮島恵子、三好明子
遺構測量委託	株式会社写真測図研究所
重機等現物提供	ジェイエイながのサービス株式会社 （本体工事請負業者：株式会社　北條組）

第３節　調査経過（調査日誌抄）

令和元年

9月17日（火）　A区、重機による表土除去作業開始（～９月19日）。作業員雇用開始。

9月18日（水）　壁精査および遺構検出開始（～10月18日）。

9月24日（火）　現場作業休止。

9月25日（水）　SB ２・SB ４～SB ７、SX ３掘り下げ開始。

10月 2日（水）　SB １掘り下げ開始。

10月 3日（木）　遺構測量。SB ３掘り下げ開始。

10月 7日（月）　現場作業休止。

10月 8日（火）　遺構測量。SK ２、SX １掘り下げ開始。

10月 9日（水）　ジェイエイながのサービス（株）、（株）北條組、埋蔵文化財センターの三者でB区の調査及び工事に関しての協議を行う。

10月15日（火）　台風19号により調査区壁が崩落。また、調査区水没のため１日排水を行う。

10月16日（水）　調査区復旧作業（～10月17日）。

10月18日（金）　空撮。遺構個別写真および全景写真撮影。遺構測量。

10月21日（月）　SB ５カマド精査。A区の調査終了。

10月22日（火）　現場作業休止（～11月４日）。

11月 5日（火）　B区、重機による表土除去作業開始（～11月６日）。

11月 6日（水）　遺構検出開始。

11月 7日（木）　SX １、SP掘り下げ開始。

11月 8日（金）　調査区全景、遺構個別写真撮影。遺構測量。機材撤収。現地における作業終了。

発掘調査風景

発掘調査風景

台風19号で水没した現場

復旧作業風景

第２章　調査地周辺の環境

第１節　遺跡の立地

古宇木遺跡が所在する長野市は長野県の北部に位置している。長野市は周囲を山並みに囲まれ、市域は古来善光寺平と呼ばれている長野盆地とその東西の山地に広がる。

調査地が所在する三輪地区を含む長野市北部一帯は、長野市北西部の飯縄山に水源をもつ浅川によって形成された扇状地地形となっている。浅川東条地籍の浅川原口を起点として長野盆地に流れ込んだ浅川は、北西から南東方向に流下し、長野市富竹付近で北東に向きを変え、千曲川と合流する。浅川扇状地は、浅川東条を扇頂として南東方向になだらかに傾斜する扇状地で、南は城東町・西和田で裾花川扇状地に接し、東端は金箱・富竹付近で千曲川氾濫原の後背湿地に接する。この扇状地は、扇頂と扇端とではかなり傾斜を異にする。扇頂では平均25/1,000の勾配があり、浅川・駒沢川がこの扇状地面を開析している。扇端では勾配が緩くなり15/1,000程度となる。

調査地は、湯谷小学校の東側に近接する南向きの傾斜地上に位置している。かつてこの辺り一帯は、耕作地が広がっていたが、昭和40年（1965）頃を境として急速に住宅地として市街化していった。旧地形の段差や沢筋に沿って宅地化が進行したため、調査地周辺の道路は狭く、碁盤目のようには整然としていない。その住宅密集地に扇状地の傾斜に沿って、かろうじて階段状に水田が残されていた場所が今回の調査地である。

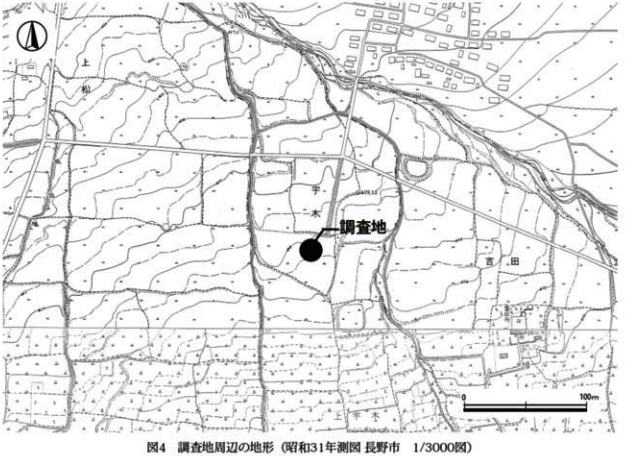


図4　調査地周辺の地形（昭和31年測図 長野市　1/3000図）

第２節　歴史的環境

浅川扇状地では、これまで多くの遺跡が発見されており、これらの遺跡を総括して「浅川扇状地遺跡群」と呼称している。古宇木遺跡として今回初めて調査を行った調査地は、浅川扇状地の扇頂に程近い扇央部に位置する。

以下、古宇木遺跡周辺の発掘事例を概観し、周辺の歴史的環境としたい。

吉田高校グランド遺跡（図５－３）

昭和45年（1965）に遺跡の存在が確認され、昭和50年（1975）、昭和51年（1976）、昭和60年（1985）、平成11年（1999）に調査が実施された。

昭和45年（1965）のプール建設途上において多量の土器が出土したことにより、遺跡の存在が確認され、それらの出土遺物をもとに弥生時代後期初頭の「吉田式土器」が型式設定された。

昭和60年（1985）の同校体育館及び格技室の新築工事に伴う第三次調査では、竪穴住居跡10軒がほぼ重複しない分布状況で検出された。住居跡の所属時期は、出土遺物から弥生時代後期初頭とされる「吉田式」期に限定されている。

平成11年（1999）に行われた、サッカーグラウンドの造成工事に伴う第四次調査では、住居跡17軒が検出され、土器・石器・勾玉未製品・土製勾玉のほか天王山式土器・アメリカ式石鏃などの東北系の遺物が出土している。調査地は第三次調査の西隣にあり、第三次調査で確認された集落の続きが良好な形で検出された。

本村東沖遺跡（図５－４）

平成３年（1991）に長野高校校舎改築に伴う調査が実施され、弥生時代中期の竪穴住居跡３軒・後期41軒、古墳時代では前期２軒・中期から後期56軒、平安時代１軒、掘立柱建物跡等を確認した。弥生時代後期の住居跡は同遺跡サーパス上松地点でも検出されており、南北300mを超える居住域が想定できる。また、古墳時代中期から後期にかけての集落から、滑石製子持勾玉、土鈴など祭祀的性格の強い遺物が出土した。地附山古墳群の造営とほぼ同時期とみられ、古墳と集落の対応関係が看取できる。

下宇木遺跡（図５－５）

平成２年（1990）にうずら幼稚園プール造成、国補公営住宅建設及び関連事業に伴う調査が実施され、弥生時代の竪穴住居跡６軒、古墳時代の竪穴住居跡11軒・溝跡・土坑・小穴等が確認された。

押鐘遺跡（図５－32）

平成２年（1990）に宅地造成事業に伴う調査が実施され、住居跡１軒、溝跡４条、土坑６基が検出された。出土遺物から、弥生時代後期から中世にわたる集落跡の一部であると考えられる。

浅川端遺跡（図５－33）

平成13年（2001）から平成14年（2002）にかけて、都市計画道路北部幹線道路改良工事に伴う調査が実施され、弥生時代の竪穴住居跡及び周溝墓、古墳時代の住居跡、奈良時代の遺構が確認された。特に、馬形帯鉤の出土については、発掘調査での出土例としては全国初の事例となった。

檀田遺跡（図５－34）

平成９年（1997）から平成15年（2003）にかけて断続的に長野市檀田土地区画整理事業に伴う調査が実施され、縄文時代中期・弥生時代中期・弥生時代後期・古墳時代前期～後期・平安時代～中世の各時期にわたる遺構と遺物が多数確認された。縄文時代中期の遺構では環状列石が市内で初めて検出された。弥生時代後期の円形周溝墓の副葬品では銅鏡と鉄鏃が連なって出土した。

引用・参考文献

笹澤浩1970「箱清水式土器発生に関する一試論」『信濃』第22巻第11号　信濃史学会

長野市教育委員会1987『長野吉田高校グランド遺跡』長野市の埋蔵文化財第22集

長野市教育委員会1988『浅川端遺跡』長野市の埋蔵文化財第29集

長野市教育委員会1991『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡（３）』長野市の埋蔵文化財第38集

長野市教育委員会1991『中俣遺跡・押鍾遺跡・檀田遺跡』長野市の埋蔵文化財第41集

長野市教育委員会1993『本村東沖遺跡』長野市の埋蔵文化財第50集

長野市教育委員会1995『本村東沖遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第67集

長野市教育委員会2001『長野吉田高校グランド遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第97集

長野市教育委員会2002『長野市埋蔵文化財センター所報』No.13

長野市教育委員会2003『浅川端遺跡（２）・差出遺跡・三合塚西古墳・石川条里遺跡（10）』長野市の埋蔵文化財第102集

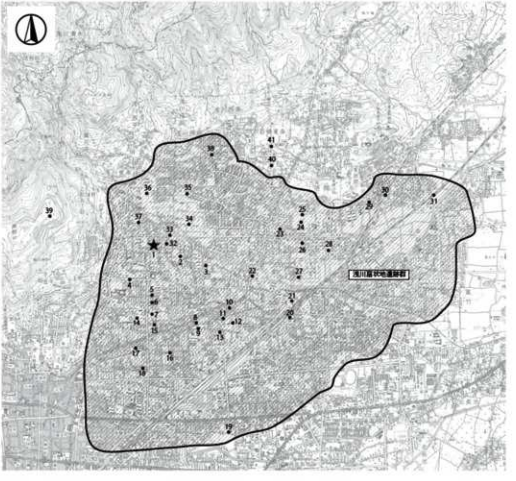
長野市教育委員会2004『檀田遺跡（２）』長野市の埋蔵文化財第105集

長野市教育委員会2005『石川条里遺跡（11）・本村東沖遺跡（３）・上長畑遺跡』長野市の埋蔵文化財第111集

長野市教育委員会2008『二ツ宮遺跡（３）・浅川端遺跡（３）』長野市の埋蔵文化財第122集

長野市教育委員会2014『押鍾遺跡（２）』長野市の埋蔵文化財第136集

長野市誌編さん委員会2000『長野市誌』第二巻 歴史編 原始・古代・中世　長野市



1 調査地（古宇木遺跡）
2 盛伝寺居館跡
3 吉田高校グランド遺跡
4 本村東沖遺跡
5 下宇木遺跡
6 下宇木 B 遺跡
7 長野女子高校校庭遺跡
8 桐原宮西遺跡
9 返目遺跡
10 吉田田町遺跡
11 桐原宮北遺跡
12 桐原要害（高野氏館跡）
13 桐原牧野遺跡
14 美和公園遺跡
15 相ノ木城跡
16 三輪遺跡
17 三輪小学校遺跡
18 本郷前遺跡
19 平林東沖遺跡
20 吉田四ツ屋遺跡
21 吉田古屋敷遺跡
22 吉田町東遺跡
23 徳間樋田遺跡
24 徳間中南遺跡
25 徳間番場遺跡
26 本堀遺跡
27 樋爪遺跡
28 二ツ宮遺跡
29 駒沢新町遺跡
30 駒沢祭祀遺跡
31 駒沢城跡
32 押越遺跡
33 浅川端遺跡
34 櫃田遺跡
35 神楽橋遺跡
36 松ノ木田遺跡
37 湯谷東古墳群
38 浅川西条遺跡
39 地附山古墳群
40 牟礼バイパス A 地点遺跡
41 牟礼バイパス B 地点遺跡

図5　調査地周辺遺跡分布図（1/50,000）

第３章　発掘調査成果

第１節　試掘調査と調査区の設定

開発事業予定地は浅川扇状地遺跡群に属し、範囲未詳として長野市の遺跡台帳に登録されている古宇木遺跡に該当する。周辺には古墳時代後期の古墳である湯谷東古墳群や、これまで３地点の調査が行われた浅川端遺跡がある。開発事業予定地においても埋蔵文化財包蔵の可能性が高いことが予想され、施工に先立ち平成30年４月24日に試掘調査を実施した。

試掘調査は、開発事業予定地内のうち、宅地造成部分の任意の地点に試掘坑（トレンチ）を掘削し、坑内断面の土層観察により遺物包含層の有無および深度を確認するものである。試掘坑は開発事業予定地内の２箇所に設定した（図６）。

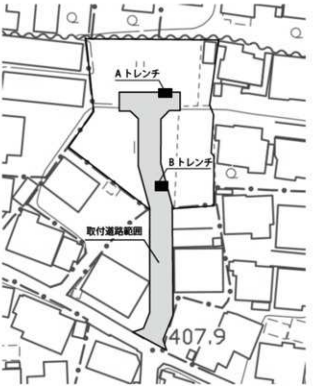


図6　試掘調査位置図（1/1,000）

試掘調査の結果、Aトレンチでは地表下約60cmで炭化物を含む暗褐色土を、Bトレンチでは地表下88cmで炭化物および土器片を含む暗褐色土を検出し、いずれも遺物包含層と判断した。また、Aトレンチでは暗褐色土層の直下に遺構覆土と推定される黒褐色土を検出した。以上より、開発事業予定地においては遺物包含層が良好に残存し、遺構を含む埋蔵文化財包蔵の可能性が高いとの知見を得た。

発掘調査は、開発事業予定地のうち、埋蔵文化財に影響がおよぶと判断された取り付け道路部分と、既存道路拡幅部分で実施した。取り付け道路のうち水田部分をA区、現道部分をB区とし、既存道路拡幅部分をC区とした。B区は既存集合住宅の生活道路として機能しており、全面掘削が困難なことからトレンチによる調査を実施した。また、C区は範囲が狭小な点と掘削時の安全性確保の観点から工事立会いとした。

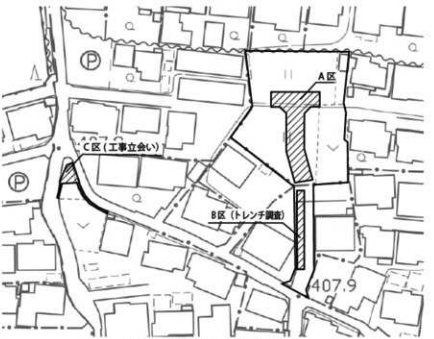


図7　調査区設定図（1/1,250）

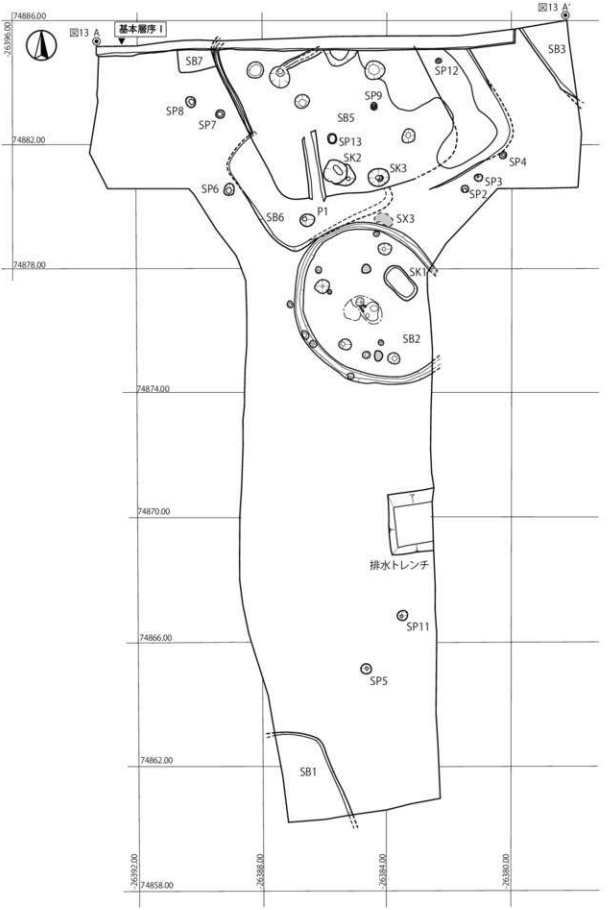


図8　A区全体図（1/120）

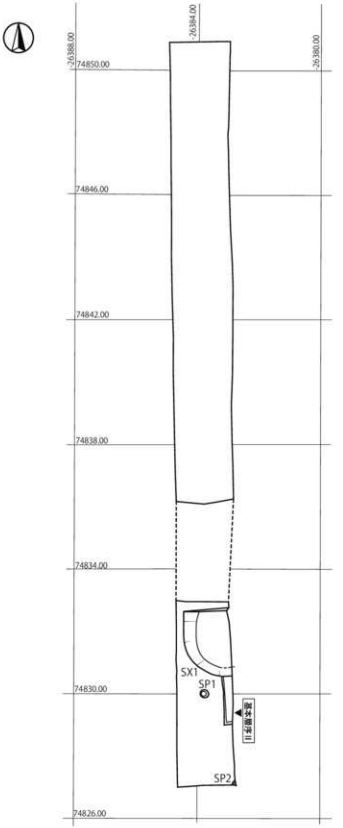


図9　B区全体図（1/120）

第２節　調査の概要

本調査の実質調査面積は、A区194m²、B区44m²である。調査地とその周辺は旧来広範囲にわたる水田域であり、調査区内の堆積土層にも複数の水田層が確認できた。

A区およびB区の基本的な土層堆積状況は、各地区全体図（図８・９）に示した地点で図10のように把握した。基本層序Ⅰの５層および７層を遺物包含層と判断した。層内に含まれる遺物から、５層が古墳時代以降の遺物包含層、下層の７層が弥生時代中期から同後期遺物包含層と考えられる。５層と６層は、SB ２の北端あたりまで追跡が可能だが、これ以南では確認できない。調査地では階段状に水田がつくられており、造成に伴って６層以上が削平されたためと考えられる。調査地一帯の旧地形は、南東方向へ下る緩斜面地で、堆積土層にもその様相が認められたが、水田の上段と下段の現地表面において約60cmの高低差が生じている。このため、遺構検出面は上段に当たるA区北端からSB ２北端付近までが現地表面下約125cm、下段にあたるSB ２北端付近からA区南端までは現地表下約115cmとなった。なお、重機掘削時に５層の存在を認識することが遅れ、水田上段部分において７層下面まで掘削してしまったため、確認できなかった遺構が複数ある可能性が高いことを付記しておく。

B区範囲は既存集合住宅の生活道路にあたるため、幅２m、長さ約24mのトレンチ調査を実施した。B区全体図（図９）における破線部分は、下水管および水道管埋設のため掘り残した箇所を示す。B区では表土および盛土層下で少なくとも５層に及ぶ水田層が認められた。トレンチ内の堆積土は全体にグライ化が認められ、遺物包含層の把握が困難であった。地表下約110cmで少量だが土器片を伴う層（h層）を確認したため、同層を遺物包含層と判断し、地表下約140cmを遺構検出面に設定、掘り下げを実施した。

調査区全体で検出した遺構は、竪穴住居跡７軒、土坑３基、小穴15基、性格不明遺構２基である。竪穴住居跡の時期の内訳は、弥生時代中期後葉１軒、同後期１軒、古墳時代後期３軒、時期不明２軒である。時期不明の住居跡は、検出範囲が狭小かつ出土遺物が僅かなため時期決定の根拠を示せなかったものだが、図13の土層堆積状況から、古墳時代以降の掘削と考えられる。遺構はA区北側に密集し、特に古墳時代後期の遺構に重複関係が目立つ。出土した遺物は弥生時代中期から後期と古墳時代後期が主体となり、土器の総量は23,057.6gを量る。

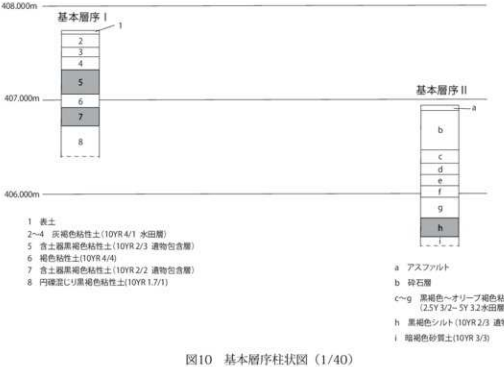


図10　基本層序柱状図（1/40）

第３節　遺構と遺物

調査で検出した遺構は、基礎情報を一覧表（表１）にまとめ、竪穴住居跡および特徴的な遺構について個別遺構図を提示した。

出土遺物は、土器、土製品、石器である。このうち、土器18点、土製品５点、石器６点の計29点を図化、掲載した。掲載した遺物には通し番号を付し、観察所見を観察表（表２）にまとめた。以下、遺構ごとに詳細を記述する。

竪穴住居跡

【SB １】

調査区の南西隅で検出した。住居西側が調査区外となるため全体は検出できていないが、検出できた遺構の規模は2.82m×1.67mを測り、検出面から住居の床面までの深さは約4.8cm、住居の平面形は隅丸長方形を呈する可能性が高い。本住居跡に伴うピットを２基検出し、調査区壁際の南西隅では、炉跡と考えられる焼土を検出した。

出土した土器の総重量は、1,807.2gを量る。SB １から出土したのは破片資料がほとんどだが、波状文と簾状文が施文されている土器や、器種は不明だが赤色塗彩が施されている土器が含まれる。このうち３点を図化した。床直上から出土した１は壺である。頸部から底部まで残存し、胴部中位に最大径を持ち、無花果形を呈する。外面には赤色塗彩が施されており、胴部上から底面にかけては黒斑を観察することができる。２の甕の内面は摩耗により器壁の荒れが激しい。３の甕は、口縁部から頸部にかけて残存している。外面には波状文と簾状文が施されており、内面はハケとミガキで調整されている。施文方法から、弥生時代後期に長野盆地を中心として盛行した箱清水式土器と考えられる。

出土した遺物には箱清水式土器が含まれていることや住居跡の検出状況から、本遺構の時期は弥生時代後期と推定される。

【SB ２】

調査区の中央付近で検出した。住居東側の一部は調査区外にあり未検出だが、ほぼ全容を確認することができた。検出できた住居の平面形は円形を呈し、規模は直径5.24mを測る。検出面から住居跡の床面までの深さは約1.7cmと極めて浅い。本住居跡に伴うピット17基、土坑１基を検出した。このうち、主柱穴はＰ２・Ｐ６・Ｐ７・Ｐ９で５本主柱穴の住居と考えられる。残りの一つは調査区外のため不明だが、Ｐ７・Ｐ９それぞれの対角となる場所にあると想定する。住居内の床面３箇所にて被熱痕（焼土）が認められた。本住居跡の壁際には、壁溝が全体に廻らされ、壁溝内にて３基のピットを検出した。検出面からの深さは約7.1cmとなる。

土坑（SK １）は住居内中央部にあり、規模は1.20m×0.63mを測り、土坑の平面形は楕円形を呈する。遺構覆土は黒色土層（１層）の下に焼土層があり、遺物は炭化物とともに焼土層から出土した。

SB ２から出土した土器の総重量は、2,175.9gを量る。19～22については、土器を転用した円盤と考えられる。４は土師器の壺である。底部のみの残存であり、内外面ともにナデ調整されている。

SB ２はSB ６と重複関係にある。住居の平面形態からSB ６は古墳時代と推定され、本住居跡のほうが時期は古いと考えられる。破片資料にも土師器が含まれているが、ほとんどが覆土から出土しており、４の土師器の壺についても混入遺物であると考えられる。

残りの良い土器は少ないが、床面や床直上から出土している土器の様相や住居の平面形態から、本遺構の時期は弥生時代中期と推定される。

【SB ３】

調査区北東隅で検出した。大部分が調査区外となり、検出し得たのは住居南西の壁から床にかけての一部のみ

である。床面は硬化が認められたが、柱穴や炉跡、壁溝は検出されなかった。

SB 3から出土した土器の総重量は162gである。いずれも細片で、図化できるものはない。土器は赤彩するものと櫛描文を施文するものがみられる。出土土器は弥生時代中・後期の割合が高いが、図13の土層堆積状況からは弥生時代包含層と判断した8層を掘り込む様子が看取される。このため、遺構の時期は古墳時代以降と考えられる。

【SB 4】

調査区北端中央で検出した。SB 5、SB 6、SB 7と重複する。重複する遺構の中では最も新しい遺構である。遺構の北側1／4程度が調査区外となる。想定される遺構の規模は7.52m×7.04mで、平面形は方形を呈する。検出面からの遺構の深さは約8cmと浅い。遺構に伴うピット、土坑は計3基検出した。P 1、SK 2が柱穴と考えられる。SK 2は調査時には単独遺構として記録を行ったが、位置関係や出土遺物からSB 4およびSB 5に伴う遺構と判断した。この他、住居の東側から中央付近にかけて貼床を検出した。カマド、炉等の燃焼施設は検出されなかったが、調査区外となった住居北壁にこれらの施設が存在する可能性がある。

SB 4から出土した土器の総重量は1,447.1gだが、重複するSB 5、6、7の遺物が混入している可能性が高い。

可能な限りSB 4と判断できる遺物を抽出し、5～7を図化した。5は土師器甕の底部と見られる破片である。内外面共に摩耗が著しく、外面の調整は定かではない。内面は板状工具によるナデの痕跡が認められる。6は須恵器甕の破片である。外面に平行タタキ痕、内面に同心円状の当て具痕が認められる。器壁の厚さは0.6cm前後とやや薄い。甕胴部の破片と考えられるが、全形は不明である。7は土師器甕である。口縁から胴中部までの残存である。口縁部に最大径を持つ長胴形を呈すと考えられる。外面は縦方向のケズリ調整を行い、内面は板状工具によるナデ調整を行う。この他、赤彩や櫛描文を施文する土器等弥生時代中期から後期の遺物が見られるが、全体に占める割合は低く、混入と判断した。遺構の時期は古墳時代後期と推定される。

【SB 5】

調査区北端中央で検出した。SB 4、SB 6、SB 7と重複する。SB 4より古く、SB 6、SB 7より新しい。遺構全体にSB 4が重複するため、住居壁や床面は残存していない。検出したP 3、P 4、P 5、SK 2が柱穴と考えられる。また、SB 4-P 1の東に延びる溝は住居の壁溝と考えられる。柱穴と壁溝の位置から、SB 5は一辺約5.1mの方形を呈する住居跡と推定される。住居跡の北壁際に当たる部分に、被熱痕が認められた。全体が焼けて硬化しており、カマド火床と考えられる。周囲には構築材の抜き取り痕と見られる窪みが検出された。

SB 5から出土した土器の総重量は1,368.1gである。ほとんどが破片資料で、器形を示すことのできる個体が少ないが、比較的残存状態が良好な8～10を抽出、図化した。8、9は土師器甕の口縁部である。10は土師器甕の胴部である。残存部分から、胴部がやや張る形状を呈すと予想される。外面には縦方向のケズリ調整、内面は板状工具によるとみられるハケ調整が認められた。遺構の時期は古墳時代後期と推定される。

なお、SB 4およびSB 5は、現地での調査時に遺構東側の貼床範囲とそれ以外の範囲で遺構の違いを認識し、東側の貼床を持つ住居跡をSB 4、西側の住居跡をSB 5として調査を行った（図12）。しかし、整理調査の段階で遺構の再検討を行ったところ、住居内ピットや土坑の配列、A区北壁の土層堆積状況等から2軒の竪穴住居が入れ子状に重複していたと判断した。

【SB 6】

調査区北側西寄りで検出した。SB 2、SB 4、SB 5と重複する。SB 2より新しく、SB 4とSB 5より古いと考えられる。住居南西の壁および床面の一部を検出した。検出範囲における遺構の規模は4.03×3.85mで、平面形は方形を呈する。検出面からの遺構の深さは約4cmと浅い。遺構に伴うピットは1基検出した。

SB 6から出土した土器の総重量は543.9gである。いずれも細片で図化できるものはない。遺物からは住居の時期を特定し難いが、遺構平面形態から古墳時代の住居跡と推定される。

【SB 7】

調査区北端西側で検出した。SB 4と重複し、SB 4よりも古い。遺構の大部分は調査区外となるため、調査区内では住居の北西隅を検出したのみで、住居の規模や内部施設等は不明である。また、住居壁を重機検出時に掘削しており、床面部分のみの検出となった。遺構の平面形は検出し得た部分から方形か長方形を呈すと考えられる。遺物は出土していない。遺構の重複関係と調査区北壁の土層堆積状況から、古墳時代以降の住居跡と判断される。

土坑・小穴

竪穴住居跡以外の遺構としては、土坑3基、小穴13基を検出した。土坑のうちSK 1、SK 2はそれぞれ竪穴住居跡に伴う遺構と考えられる。SK 3からは遺物が出土せず、遺構の時期は特定し難い。重複関係を明確にできなかったため断定はできないが、位置関係からSB 5の出入口施設の可能性がある。小穴は、その用途や時期が明らかなものはないが、出土遺物は竪穴住居跡の時期に概ね合致するため、該期に掘削されたものと考えられる。

性格不明遺構

【SX 1】

B区南側で検出した。遺構東側は調査区外となり、北側は攪乱によって掘り込まれているため、遺構の全形は不明である。遺構底部は擂鉢状になり、検出面からの深さは約40cmである。検出範囲においてピット等の内部施設は無く、炉跡あるいはカマド跡等の燃焼施設も認められなかった。

出土遺物は土器236.3gである。大半が破片資料で、図化し得たのは16のみである。16は須恵器の壺で、胴下部から底部にかけての残存である。底部外面に回転糸切による切り離し痕が残る。破片資料は土師器、黒色土器、須恵器、赤彩等が認められるが、遺構の時期決定に有力な資料はなく、遺構の時期は不明である。遺構の性格に関しては土坑、あるいは竪穴住居跡の可能性が挙げられるが、いずれも断定し難い。

【SX 3】

A区北側東で検出した。SB 2の北縁に一部重複する遺構で、上面からの落ち込みは認められず、炭化物や多量の焼土が含まれた土と共に破砕した土器がまとまった状態で検出された。当初はSB 2に付属するカマドを想定したが、調査中SB 2が弥生時代中期の遺構と判明し、他に帰属遺構を見出せなかったため、性格不明遺構として報告する。SX 3の堆積土は焼土ブロックが多量に混じる黒色土（上層）と、灰混じり土（下層）に大別される。堆積土を全て除去したところ、被熱痕が認められた。周囲からは複数の礫が検出されたが、被熱面から浮いた位置で検出されたものがほとんどである。

出土遺物は土器8,667.7gで、大半が上層にあたる焼土ブロック混じり土から出土した。図化した5点（14～18）はいずれも土師器の甕である。14、15、17は胴下部から底部を欠損しているが、5点とも口縁部に最大径を持つ長胴形を呈する。胴部外面はケズリ調整を行う。外面が摩耗した個体が多く、器面が一部剥離したもの（16、17）も見られた。また、17はケズリ調整のほか一次調整と考えられるハケ調整痕を残す。胴部内面は板状工具で調整するもの（15、16、18）とハケ調整するもの（14、17）が認められた。この他、図化し得なかったが土師器甕の破片が多く見られた。

SX 3は、堆積土の様相や被熱痕から、何らかの燃焼行為を伴う施設であると考えられ、古墳時代後期のカマド残欠の可能性がある。調査では帰属遺構を検出することができなかったが、SX 3をカマド跡とすれば、古墳時代後期住居跡の存在を想定できよう。

包含層・検出面の遺物

包含層および検出面からは調査区全体で4,481.7gの土器と土製品、石器が出土した。図示したものは、土師器甕（12）、高杯（13）、円盤形土製品（23）、石器（24～29）である。12は口縁から頸部にかけての残存である。外面に縦方向のケズリ調整が認められる。13は高杯の杯部である。下部に明確な稜がみられ、外面はミガキ調整が行われる。

石器のうち、24～26は剥片である。27は縁に加工痕が見られ、石斧あるいは石槌としての使用が考えられる。また、28・29は石斧未製品の可能性がある。

第4節　C区工事立会い

C区の工事立会いは令和元年8月19日に実施した。工事立会いの対象としたC区の面積は約22m²である。A・B区から約90m西の地点で、標高はB区南端とほぼ同等である。

地表下約60cmで遺物包含層と考えられる暗褐色土を検出した。同層は、観察を行った範囲では10～20cm程度の堆積が確認された。遺構と判断される落ち込みや遺物は検出されなかった。

C区 表土掘削状況

C区 土層堆積状況

表1　遺構一覧表

地区	遺構名	記号	旧番号	遺構			出土土器			その他出土遺物	時期
				形態	規模（m）	備考	実測点数	破片（g）	総量（g）		
A	1号住居跡	SB1		隅丸長方形	2.82×1.67		3	566.8	1807.2		弥生後期
A	2号住居跡	SB2		円形	径5.24	SB6と重複	1	2065.5	2175.9	円盤形土製品	弥生中期
A	3号住居跡	SB3		不明	不明		0	162	162		不明
A	4号住居跡	SB4		方形	(7.52×7.04)	SB5・SB6・SB7と重複	3	752.1	1447.1	SB5・6・7の遺物を含む	古墳後期
A	5号住居跡	SB5		(方形)	(5.1×5.1)	SB4・SB6・SB7と重複	3	745.3	1368.1	SB6・7の遺物を含む	古墳後期
A	6号住居跡	SB6		方形	4.03×3.85	SB2・SB4・SB5と重複	0	543.9	543.9		古墳後期
A	7号住居跡	SB7		(方形)	1.14×0.60	SB4と重複	0	0	0		不明
A	1号土坑	SK1		長方形	1.20×0.63	SB2内	0	212.9	212.9		弥生中期
A	2号土坑	SK2		楕円形	1.01×0.70	SB5の柱穴	0	85.3	85.3		古墳後期
A	3号土坑	SK3		楕円形	0.68×0.57	SB5の出入り口施設か	0	0	0		古墳後期
A	1号小穴	SP1		—	—		0	6.3	6.3		不明
A	2号小穴	SP2		円形	径0.23		0	0	0		不明
A	3号小穴	SP3		円形	径0.26		0	0	0		不明
A	4号小穴	SP4		円形	径0.22		0	0	0		不明
A	5号小穴	SP5		円形	径0.35		0	3.2	3.2		弥生？
A	6号小穴	SP6		楕円形	0.4×0.31		0	0	0		不明
A	7号小穴	SP7		円形	径0.29		0	0	0		不明
A	8号小穴	SP8		円形	径0.35		0	10.7	10.7		弥生（後期）？
A	9号小穴	SP9		楕円形	0.24×0.18	SB5内にあり	0	15.0	15.0		不明
A	10号小穴	SP10		—	—		0	4.8	4.8		不明
A	11号小穴	SP11		円形	径0.33		0	0	0		不明
A	12号小穴	SP12		円形	径0.20	SB5内にあり	0	0	0		不明
A	13号小穴	SP13		楕円形	0.33×0.28	SB5内にあり	0	0	0		不明
A	3号性格不明遺構	SX3	SL1	不明	—	SB2と重複	5	2473	8667.7		古墳後期
A	トレンチ	サブトレ3・4		—	—		0	1631	1631	SB4・5・7の遺物を含む	—
B	1号小穴	SP1		円形	径0.29		0	0	0		不明
B	2号小穴	SP2		円形？	径0.11		0	0	0		不明
B	1号性格不明遺構	SX1	SX2	楕円形？	2.16×1.46		1	139.6	236.3		不明
A・B	包含層・検出面			—	—		2	4318.8	4481.7	円盤形土製品	—
	調査区外			—	—		0	198.5	198.5		—
						総計	18	13929.7	23057.6		

※SP1・SP10は調査区壁崩落のため未測量である。

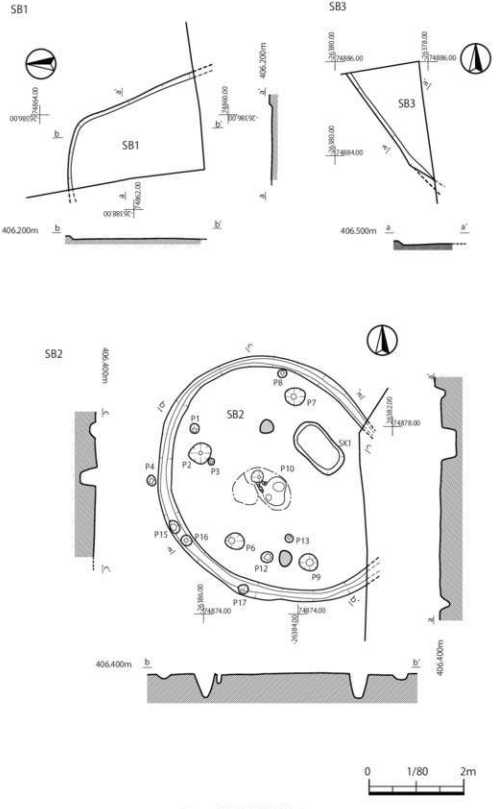


図11　個別遺構実測図1

SB4・5・6

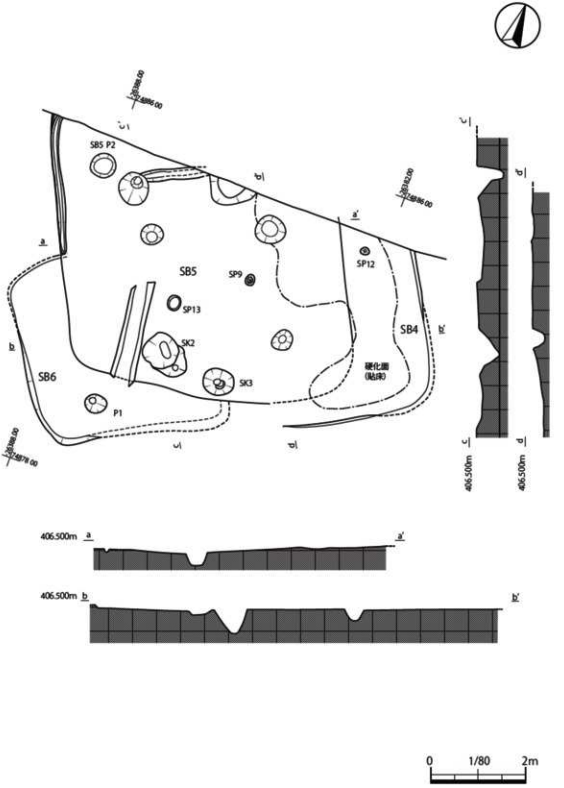


図12　個別遺構実測図2

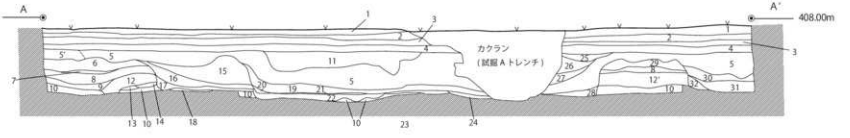


図13　調査区土層・土層堆積状況図

1 表土
2 褐灰色粘性土 (10YR4/1) 水田層
3 褐灰色粘性土 (10YR4/1) 水田層
4 褐灰色粘性土 (10YR4/1)、暗褐色土 (10YR3/4) まじり 水田層
5 黒褐色粘性土 (10YR2/3) しまり強。径 3 ～ 10cm 程度の礫含む。(包含層)
5' 黒褐色粘性土 (10YR2/3) しまり強。径 10cm 以上の礫含む。
6 褐色粘性土 (10YR4/4) しまり強。
7 にぶい黄褐色粘性土 (10YR4/3) しまり強。
8 黒褐色粘性土 (10YR2/2) しまり強。径 1 ～ 3cm 程度の小石・土器片含む (包含層)
9 暗褐色粘性土 (10YR3/4) しまり強。
10 暗褐色粘性土 (10YR3/4) しまり強。9より淡い色の土色
11 黒褐色粘性土 (10YR2/1) しまり強。小石。下部に灰色土ブロック混じり。
12 黒褐色粘性土 (10YR1.7/1) しまり強。径 5cm 程度の円礫含む。
12' 黒色粘性土 (10YR1.7/1) しまりあり。径 5cm の円礫・土器含む。
13 黒褐色粘性土 (10YR2/2) しまり強。小石少量含む。
14 黒褐色粘土 (10YR2/2) しまり強。
15 暗褐色粘性土 (10YR3/4) しまり強。白色の小礫多量に含む。（SB7 覆土）
16 暗褐色粘性土 (10YR3/3) しまり強。白色・オレンジ色の小礫多量。径 3cm 程度の小石、土器含む。(SB7 覆土)
17 黒褐色粘性土 (10YR2/3) しまり強。微量の炭化物含む。(SB7 覆土)
18 黒褐色粘性土 (10YR2/2) しまり強。(SB7 覆土)
19 黒褐色粘性土 (10YR2/3) しまり強。白色・オレンジ色の小礫・土器含む。(SB5 覆土)
20 黒褐色粘性土 (10YR2/2) しまり強。白色の小礫含む。(SB5 覆土)
21 黒褐色粘性土 (10YR2/3) しまり強。黄褐色土ブロック状混じり。(SB5 覆土)
22 黒褐色粘土 (10YR2/2) しまり強。炭化物少量含む。(SB5 掘方埋土)
23 黒褐色粘土 (10YR2/2) しまり強。白色の小石少量含む。(SB4 覆土)
24 黒褐色粘土 (10YR2/3) しまり強。焼土ブロック混じり。(SB4 カマド焼土)
25 黒褐色粘性土 (10YR2/2) しまり強。径 3cm 程度の小礫含む。
26 黒褐色粘性土 (10YR2/2) しまり強。白色・オレンジ色の小礫含む。
27 黒褐色粘性土 (10YR2/2) しまり強。微量の炭化物あり。オレンジ色のブロック混じり。
28 にぶい黄褐色粘性土～黒色粘性土 (10YR4/3,2/1) しまり弱。径 3cm 程度の小礫含む。
2/1 の土の中に 3/4 の土が帯のように入る。(SB5 覆土)
29 暗褐色砂質土 (10YR3/3) 黄褐色土ブロック混じり。
30 暗褐色粘性土 (10YR3/4) しまりあり。白色・オレンジ色土ブロック状混じり。(SB3 覆土)
31 黒褐色砂質土 (10YR2/3) しまりあり。径 5 ～ 7cm 程度の礫含む。(SB3 覆土)
32 黒褐色粘性土 (10YR2/3) しまりあり。白色の小礫少量含む。(SB3 覆土)

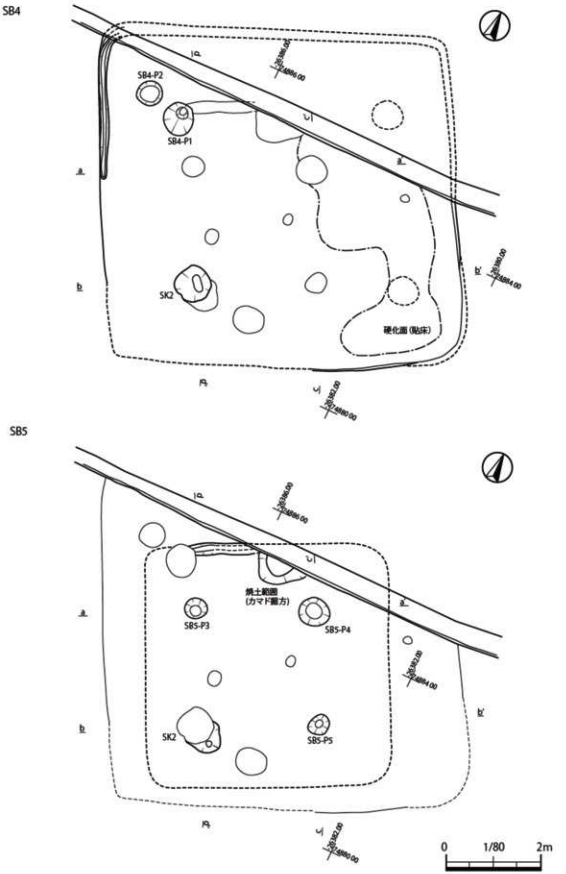


図14　個別遺構実測図3

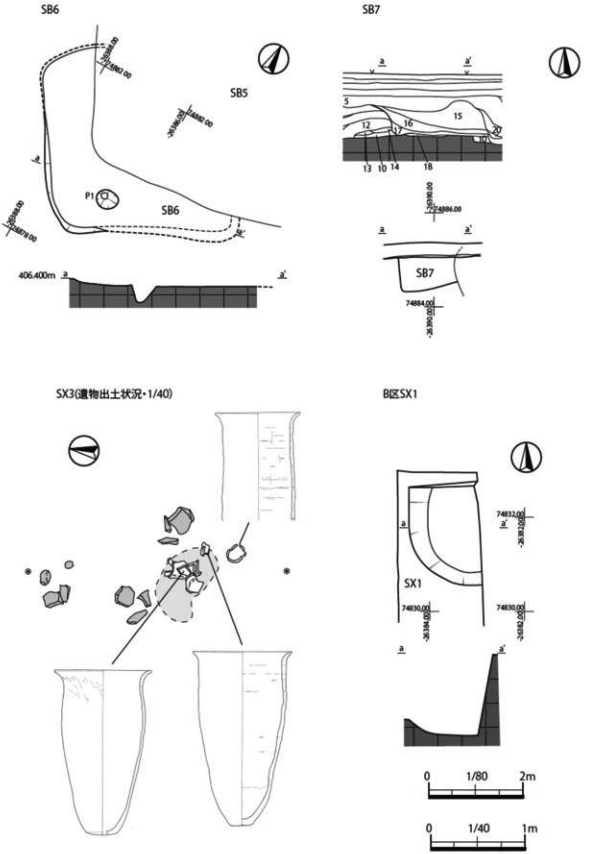


図15　個別遺構実測図4

A区全景（空撮写真・上が北）

A区全景（北西から）

SB2完掘状況（空撮・右が北）

SB4・SB5・SB6完掘状況（空撮写真・上が北）

B区全景（北から）

B区全景（南から）

B区土層堆積状況（東壁北側）

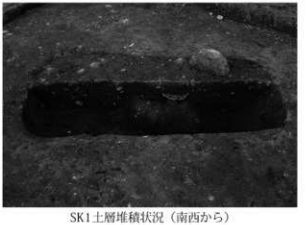
B区土層堆積状況（東壁南側）

A区土層堆積状況（北壁）

SB1遺物出土状況（西から）

SB1完掘（東から）

SB2完掘（西から）


SK1土層堆積状況（南西から）

SK1遺物出土状況（南西から）

SK1完掘（南西から）

SB3完掘（南西から）

SB4・5完掘（南東から）

SX3土器出土状況（上層）

SX3土器出土状況（下層）

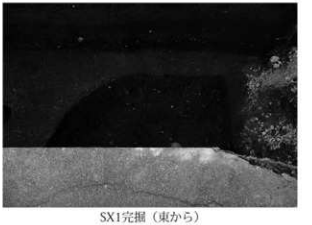

SX1完掘（東から）

表2　遺物観察表

図版		出土遺構		種別	器種	残存		寸法（cm）			成形・調整・施文		備考・その他
図	番号	遺構名	位置			部位	残存率	口径	底径	器高	外面	内面	
16	1	SB1	床直上	弥生土器	壺	頸-底	3/4	—	6.6	(13.8)	赤彩 ミガキ	ナデ 内底:指ナデ	黒斑
	2	SB1	覆土	弥生土器	甕	胴中-底	1/2	—	6.5	(11.9)	ハケ→ミガキ	ナデ	
	3	SB1	床直上	弥生土器	甕	口-頸	1/3	15.2	—	(7.8)	波状文 簾状文	ハケ→ミガキ	
	4	SB2	床直上	土師器	壺	底部	3/4	—	7.1	(2.8)	ナデ	ナデ	
	5	SB4	覆土上層	土師器	甕	底部	1/6	—	9.6	(1.6)	摩耗不明	工具ナデ?	
	6	SB4	覆土下層	須恵器	甕	胴部		—	—	—	平行タタキ	同心円当て具痕	
	7	SB4	覆土下層	土師器	甕	口-胴中	3/4	(20.0)	—	(16.3)	口縁:横ナデ 胴:ケズリ	口縁:横ナデ 胴:ナデ	
	8	SB5	床面	土師器	甕	口縁	1/6	18.5	—	(4.1)	横ナデ	横ナデ	
	9	SB5	覆土上層	土師器	甕	口縁	1/6	18.6	—	(3.6)	横ナデ	ナデ	器面摩耗
	10	SB5	層位	土師器	甕	胴部	1/10	—	—	(19.7)	ケズリ・ヨコナデ（?）	横ハケ	胴下部に黒斑
	11	SX1	覆土	須恵器	壺	底	1/3	—	9.6	(4.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
	12		検出面	土師器	甕	口縁	1/5	(17.0)	—	(4.3)	横ナデ	横ナデ ナデ	
	13		検出面	弥生土器	高杯	杯部	4/5	—	—	(3.4)	ミガキ	ミガキ	
17	14	SX3		土師器	甕	口-胴上	2/3	13.6	—	(12.0)	ケズリ 口:横ナデ	ハケ 口:横ナデ	黒斑
	15	SX3		土師器	甕	口-胴上	3/4	17.9	—	(22.8)	ケズリ→ナデ? 口:横ナデ	板状工具ナデ 口:横ナデ	
	16	SX3		土師器	甕	口-底	3/4	20.8	4.65	36.75	ナデ 胴（下）:ケズリ→ナデ	板状工具ナデ	
	17	SX3		土師器	甕	口-胴	4/5	18.6	—	(31.0)	ハケ→ケズリ 口:横ナデ	ハケ 口:横ナデ	黒斑
	18	SX3		土師器	甕	口-底	4/5	20.2	6.7	34.9	ケズリ 口:横ナデ	板状工具ナデ 口:横ナデ	

図版		出土遺構		種別	名称	寸法（cm）・調整・その他
図	番号	遺構名	位置			
18	19	SB2	覆土	土製品	円盤	直径2.7・土器転用
	20	SB2	覆土	土製品	円盤	直径3.2・土器転用
	21	SB2	覆土	土製品	円盤	直径3.2・土器転用・穿孔途中
	22	SB2	覆土	土製品	円盤	6.1×3.4・土器転用・外面ナデ→ミガキ・内面:工具ナデ
	23		検出面	土製品	円盤	直径6.5・土器転用・刺突文
	24	SK1	覆土3層	石製品	剥片	4.03g・頁岩製・全体的に風化
	25	SK1	覆土	石器	剥片（縦長）	13.22g・頁岩製
	26	SK1	覆土1層	石器	剥片	21.19g・頁岩製・原礫面残存
	27	SB6	床直上	石器	不明	160.21g・安山岩製・両縁に加工痕あり・打製石斧または石槌の可能性あり
	28	SB2	床面	石器	石斧未製品	222.86g・安山岩製
	29		包含層	石器	不明	775.65g・凝灰岩製

凡例　口：口縁部　　ハケ：ハケ調整
　　頸：頸部　　ナデ：ナデ調整
　　胴：胴部　　ケズリ：ケズリ調整
　　底：底部　　ミガキ：ミガキ調整

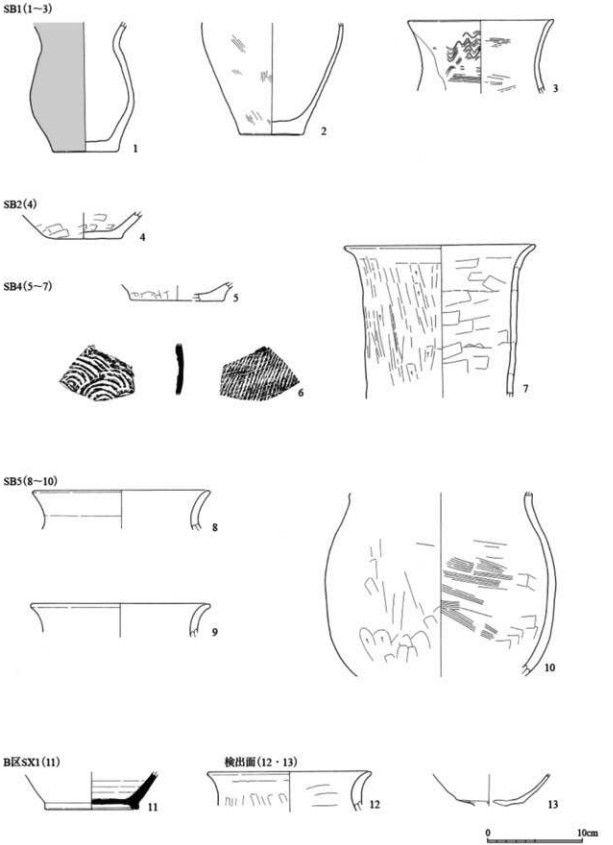


図 16　遺物実測図 1（1 / 4）

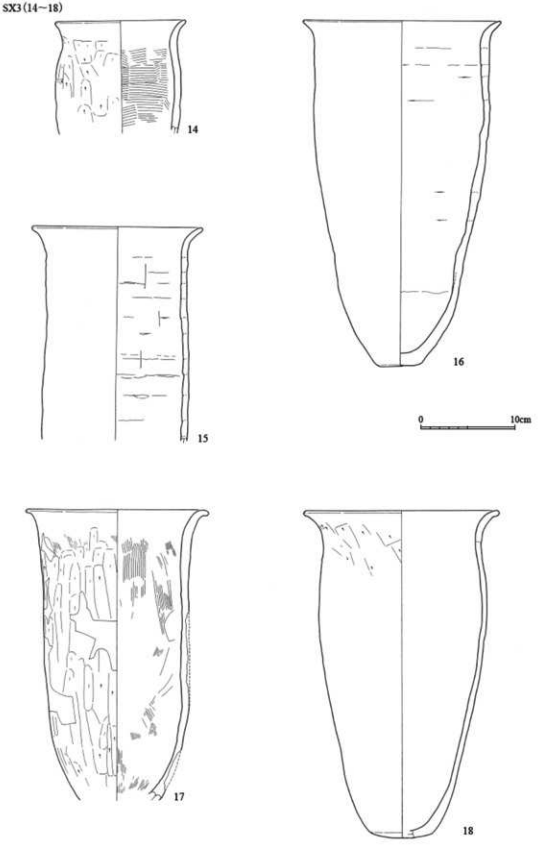


図 17　遺物実測図２（1 / 4）

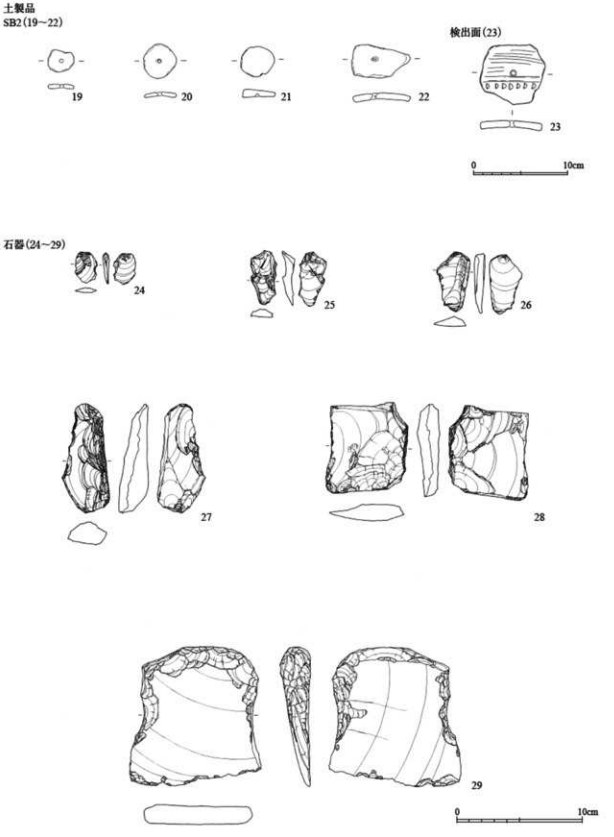


図18　遺物実測図3（19～23　1/4、24～29　1/3）

遺物写真図版 1

1

2

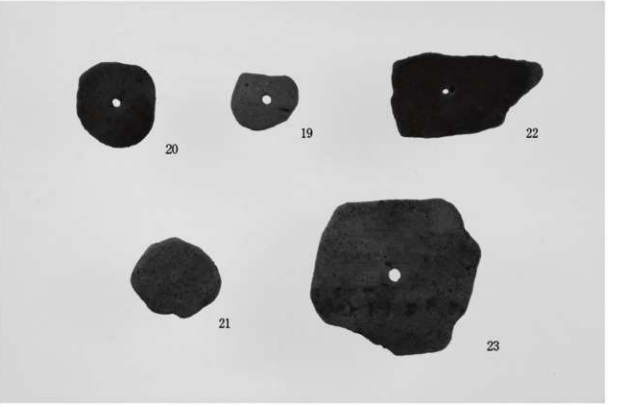
15

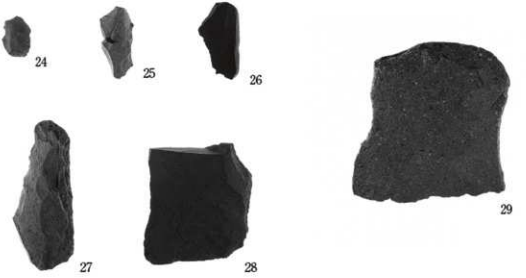
16

17

18

遺物写真図版 2





第４章　総括

本調査で検出された遺構から、古宇木遺跡では弥生時代中期と同後期、古墳時代後期に集落の形成が認められた。古墳時代前期から中期にかけての遺構は検出されず、この期間は別の場所に集落が移動していたと考えられる。また、奈良時代以降に関しては、平安時代の遺物が少量出土しているが、該期と判断できる遺構は検出されなかった。奈良時代以降は再び集落が移動したと推察する。調査で確認できた範囲は限られるが、調査成果をもとに、予想される古宇木遺跡の集落の広がりと、浅川両岸の諸遺跡との関連について概観し、総括としたい。

弥生時代中期と後期の遺構は、いずれも竪穴住居跡を１軒ずつ検出したのみであり、集落規模や範囲を想定することは難しい。SB ２は住居跡の平面形態や出土土器から弥生時代中期後半の栗林式期の竪穴住居跡と考えられる。出土土器の大半が破片資料で器形の全容を把握できる資料がないため、栗林式期における時期の細分は困難である。

長野市内におけるこれまでの発掘調査成果から、該期の集落は、住居数が数十軒に上る大規模な集落と、10軒前後の比較的小規模な集落が存在することが指摘されている。浅川扇状地においては後者が多数を占め、扇状地上に小規模な集落が点在する様相が看取されることから、古宇木遺跡で検出された該期の集落もこうした小規模集落である可能性がある。今回の調査では、該期の集落範囲を推定するには至らなかったが、調査区外に同集落の居住域が展開していくと考えられる。なお、古宇木遺跡周辺では、浅川端遺跡、檀田遺跡、神楽橋遺跡などで弥生時代中・後期の集落が検出されている（註）。

古墳時代後期の遺構は、竪穴住居跡３軒を検出した。このほか、時期不明とした竪穴住居跡が２軒あるが、土層の堆積状況と遺構の重複関係から、少なくとも古墳時代の範囲に収まると考えられる。時期確定の根拠となる遺物を検出することができなかったが、調査区全体を通して古墳時代前～中期の遺物がほとんど検出されなかったことから、古墳時代後期の遺構である可能性は高いといえる。古墳時代後期の竪穴住居跡は調査区の北端に集中し、３軒が重複した状態である。出土遺物からは大きな時期差は見出せず、一定期間継続して居住していたと推察する。現段階では集落範囲は不明と言わざるを得ないが、遺構の分布状況から調査区以北の標高408m付近に同集落の居住域中心部が存在したと考えられる。なお、調査区以南に関しては竪穴住居跡の密度は低くなることが予想されるが、集落縁辺部の遺構が展開する可能性がある。

浅川扇状地において、古墳時代後期は集落が著しく増加した時期である。住居数20軒を超す大規模集落が形成され、その周辺に数軒から10軒規模の小集落が点在する傾向が認められる。古宇木遺跡周辺で注目されるのは、本調査地から北東へ約250mの地点にある浅川端遺跡である。浅川端遺跡は、浅川右岸の微高地上に形成された集落遺跡で、弥生時代中期から平安時代までの集落跡が確認されている。同遺跡において最も集落規模が拡大したのは古墳時代後期で、50軒に上る竪穴住居跡が検出された。重複が多く、同時期に存在した住居数は検出数と同等ではないが、大規模な拠点的集落であった可能性は高いと考える。浅川端遺跡の古墳時代後期集落を浅川右岸における拠点的な集落と仮定するならば、その位置関係から、古宇木遺跡における古墳時代後期集落は、浅川端遺跡周辺で衛星的に形成された小規模集落の一つと推測される。

本調査は、古宇木遺跡内において初めての発掘調査であり、複数時期にわたる集落の形成を確認することができた。しかし、確認し得たのは遺跡範囲の一部である。今後、調査地周辺の埋蔵文化財包蔵状況の把握に努めるとともに、周辺遺跡を含めた古宇木遺跡の検討が課題である。

（註）

図19では古宇木遺跡周辺の弥生時代中・後期と古墳時代後期集落の予想範囲を示した。神楽橋遺跡は昭和50年の調査で弥生時代中期後半の集落が検出されているが、調査詳細が未報告となっているため、遺跡の位置を示すに留めた。

引用・参考文献

上水内郡誌編集会　1976 『上水内郡誌』歴史編

（財）長野県埋蔵文化財センター　1999 『榎田遺跡』上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12

長野市教育委員会　1988 『浅川端遺跡』長野市の埋蔵文化財第29集

長野市教育委員会　2003 『浅川端遺跡（２）　差出遺跡・三谷坂西古墳　石川条理遺跡（10）』長野市の埋蔵文化財第102集

長野市教育委員会　2008 『吉田古屋敷遺跡』長野市の埋蔵文化財第120集

長野市教育委員会　2008 『二ツ宮遺跡（３）　浅川端遺跡（３）』長野市の埋蔵文化財第122集

長野市教育委員会　2002 『長野市埋蔵文化財センター　所報』No13

長野市誌編さん委員会　1997 『長野市誌』第２巻　歴史編　原始・古代・中世　長野市

長野市誌編さん委員会　1997 『長野市誌』第12巻　資料編　原始・古代・中世　長野市

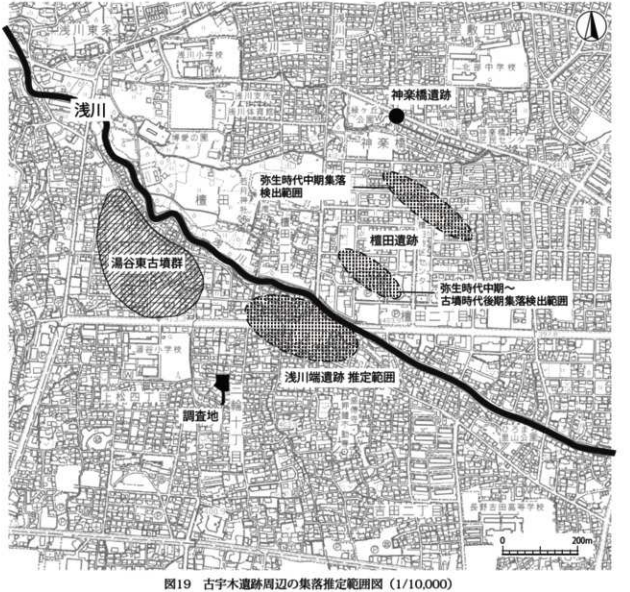


図19　古宇木遺跡周辺の集落推定範囲図（1/10,000）

報告書抄録

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん　こうきいせき
書　　名	浅川扇状地遺跡群　古宇木遺跡
副 書 名	三輪十丁目分譲地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第161集
編著者名	飯島哲也　小野涼香　篠井ちひろ
編集機関	長野市教育委員会　長野市埋蔵文化財センター
所 在 地	〒381-2212　長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106
発行年月日	2021（令和3）年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
古宇木遺跡（こうきいせき）	長野県長野市三輪十丁目（ながのけんながのし みわじゅうちょうめ） 493番1外	20201	A−057	36° 40′ 27″	138° 12′ 17″	20190917 ～ 20191108	238㎡	分譲地造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古宇木遺跡	集落	弥生時代中期 弥生時代後期 古墳時代後期	弥生時代中期竪穴住居跡1 同後期竪穴住居跡1 古墳時代竪穴住居跡5 土坑 小穴	弥生土器 土師器 須恵器	弥生時代中～後期および古墳時代後期集落跡

概要

古宇木遺跡は、浅川扇状地の扇頂付近に位置する集落遺跡である。調査では弥生時代中期と同後期、古墳時代後期の竪穴住居跡を検出し、該期の集落跡であることが判明した。弥生時代の遺構は調査区に点在する状況で、集落規模や範囲の想定には至らなかった。古墳時代後期の遺構は調査区北端に集中し、南下するに従って密度を低くする。このことから、集落中心は調査区以北にあると推測される。

長野市の埋蔵文化財第161集

浅川扇状地遺跡群
古宇木遺跡

令和3年3月31日　発行

発　行　長野市教育委員会
編　集　長野市埋蔵文化財センター
印　刷　三和印刷株式会社